

第4回 「読者の視点に立った年金報道」

～社会保障問題にみる新聞報道の変化～

2007・10・23

前田浩智・毎日新聞生活家庭グループ副部長

■社会保障報道の多様化

▽マクロからミクロへ

▽「国民、関係者がどういう影響を受けるか」へのウエイトの変化

(従来は、政府・与党が何を決めたか、を伝えるだけだった)

■社会保障報道の重厚長大化

▽おろそかにできない節目

(従来は、一度大きく取り上げれば、終わり)

▽ルポ、シミュレーションなど、さまざまな手法の導入

■国の政策決定の流れ（法整備を伴うもの）

省内の検討→審議会等（諮問・答申）→法案作成→国会審議→衆院可決→参院可決・成立→〇〇法施行

■足場の変化

▽省庁の自信喪失と現場遊離→くるくる変わる方針

例) 介護保険制度の軽度利用者切り捨て、療養病床削減の緩和など

▽族議員の衰退→現場の声が政策に届かない

▽現場の要望、悲鳴をどう集約するかが報道側の課題に

(霞ヶ関・永田町報道からの脱却)

■報道の変化の背景にあるもの

▽少子高齢化の急速な進行

▽高度成長時代の終焉（ひずみを帳消しにする余裕の喪失）

▽社会保障政策が「アメ」から「ムチ」に

(「いくらもらえるか」から「いくら負担しなければならないのか」に)

▽政策の硬直化←ライフスタイルの変化に寄り添えない

(失われた「モデル世帯」)

▽公共心の変化（衰退？）と損得意識の増大

《年金記録漏れ問題と報道》

▽ 社保庁問題への慣れ（メディアの失敗）

▽ 「現場がない年金」に現場ができた

▽ 過度に理念的だった安倍政権への反発

（不安いっぱい年金→安倍政権のリアリティ不足→「何が戦後レジームからの脱却だ」
→不安マグマの爆発）

▽ 「あるべき論」の衰退への懸念